



平安だより 2021年7月号 平安幼稚園

「思いやりをもって」 牧師・園長 江間紗綾香

『人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい。』

(ルカによる福音書六章三一節)

二〇一七年に出版され、ベストセラーになった故・渡辺和子シスターが書かれたエッセイ『置かれた場所で咲きなさい』をご存知でしょうか。シスターご自身が経験されたことから覚えてきたことが書かれており、人々の心に寄り添う言葉に慰められたり、励まされたりした方が多くいたことと思います。エッセイの中にはノートルダム清心女子大学学長時代の事がいくつか書かれています。その中で印象に残っているお話を紹介します。

『思いがけず学長という立場につけていただきました。やはり苦勞がございました。私はいわゆる「くれない族」というものになりました。お辞儀をしてくれない。あいさつをしてくれない。こんなに苦勞しているのに労働してくれない。そういう「くれない族」。私は「もっと人様に仕える仕事をさせていただくために入ったのに」と私を修道院に推薦してくださったアメリカ人の神父様のところまいりまして、縷々(るる)と不平不満を述べました。すると神父様は、「あなたが変わらなければ、どこへ行っても何をしても同じだよ」とおっしゃいました。目からうろこが落ちました。他人が変わることばかり求め、幸せを他人まかせにしていた自分に気づかされました。』

何とも耳の痛い話だと私自身はいつも思っています。女子中高で教えていた時、つい生徒達のやっていることに口だけではなく、手も出したくなってしまいうことが多々ありました。それは、「指示通りに動いてくれない」「時間に間に合わせてくれない」という思いがあったからです。振り返っても、自分勝手な理由で生徒を動かそうとしていたと思います。しかし、それでは生徒達が成長をしないと思い直し、生徒達が自主的に動くことができるための声かけをしようと思がけるようになりました。その時に一番大切にしていたのは、「待つ」ということでした。待つことには忍耐を必要とします。生徒への信頼も必要です。初めの頃は待つことが辛く感じることもありました。ところが、待つとみると生徒達も生き活きと動き、想像以上のものを作り上げること、達成感を一緒に味わえることを経験し、信頼して待つことの大切さを改めて知ることができました。また、「してくれない」のではなく、「させていない」「ことに気づき、大いに反省しました」。

ふとした時に自分を見つめ直すと、相手に求めていることが何と多いのだろうと気づく時があります。それは、神様に対してと同じです。神様だから聞いてくれる、願いをかなえてくれる、と私たちは当たり前前に思っています。しかし、神様も私たちに求めておられることがあります。「神様を信じ、一切のことを委ねること」「感謝をささげること」です。これは決して簡単なことではありません。私たちは不満を持ちやすく、自己中心的になりがちだからです。しかし、神様が求めておられる(信じ、感謝すること)をしてみると、周囲の支えに気づかされ、求める以上に人に求められていることに注意が向くようになるのです。「人にしてもらいたいことは人にもする」ことは当たり前のように思われるのですが、子供たちに示す前に、私たち大人が自らを振り返ってみる必要があることを心に留めたいものです。